

経済・金融 フラッシュ

ロシア GDP(2022年10-12月期) —前年比伸び率のマイナス幅はさらに縮小

経済研究部 主任研究員 高山 武士

TEL:03-3512-1818 E-mail: takayama@nli-research.co.jp

1. 結果の概要: 前年同期比のマイナス幅が縮小

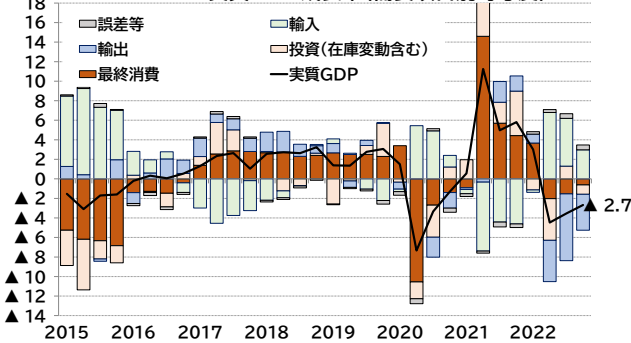
4月7日、ロシア連邦統計局は国内総生産（GDP）を公表し、結果は以下の通りとなった。

【実質GDP成長率（未季節調整系列）】

- ・2022年10-12月期の前年同期比伸び率は▲2.7%、予想¹（同▲3.5%）を上回り、前期（同▲3.5%）からマイナス幅が縮小した（図表1・2）

（図表1）

（前年同期比、%）ロシアの実質GDP成長率（需要項目別寄与度）



（注）未季節調整系列の前年同期比、投資は在庫変動を含む。

（資料）ロシア連邦統計局、CEIC

（四半期）

（図表2）

（前年同期比、%）ロシアの実質GDP成長率（供給項目別寄与度）



（注）未季節調整系列の前年同期比、寄与度・総付加価値は筆者による簡易的な試算値

（資料）ロシア連邦統計局、CEIC

（四半期）

2. 結果の詳細: 交易条件は改善傾向が続いている

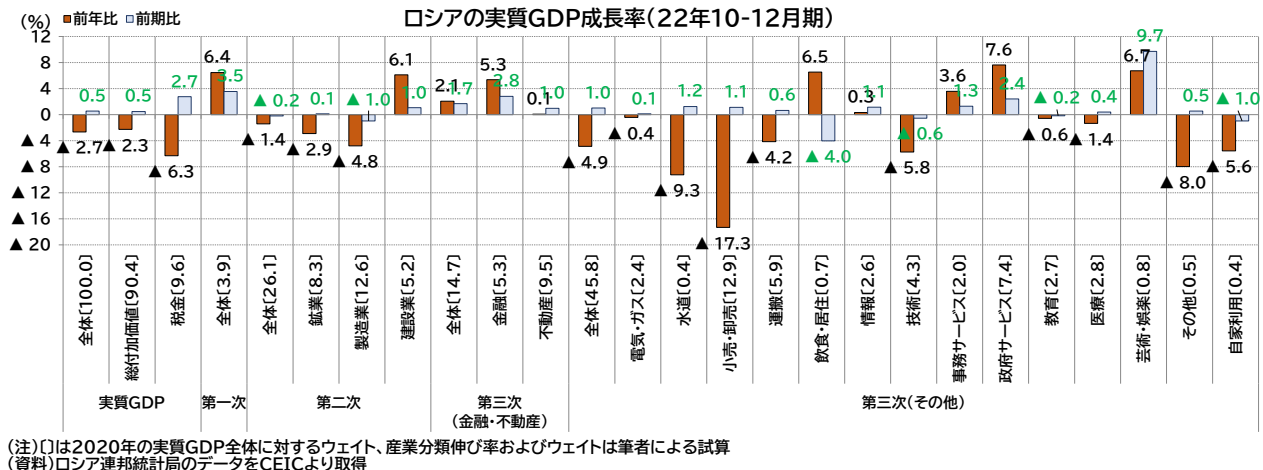
ロシアの22年10-12月期の実質GDP伸び率は▲2.7%となり、7-9月期（▲3.5%）からマイナス幅が縮小した。また、季節調整系列の前期比で見ると、10-12月期は0.5%（年率換算2.2%）となった。4-6月期（▲4.8%、年率換算▲17.7%）には大幅マイナスになったものの、その後7-9月期には0.5%（年率換算2.1%）とプラスに転じ、10-12月期もほぼ同率で成長したことになる。なお、22年10-12月期はコロナ禍前の水準（19年10-12月期）とほぼ同水準となっている。

需要項目別には、今回、ロシアがウクライナに侵攻して以降、公表されていなかった輸出入のデータが（過去分も含めて）公表された。前年同期比では輸出入ともに4-6月期以降は2桁減の大幅マイナスとなっているが、輸入の減少はGDPを押し上げるため、成長率の寄与で見ると輸出減によるマイナスと輸入減によるプラスが相殺される形になっている（図表1）。なお、前期比では輸入の減少が続く一方、輸出は7-9月期を底に10-12月期は反発している。ただし水準で見ると、輸出

¹ bloomberg 集計の中央値。以下の予想値も同様。

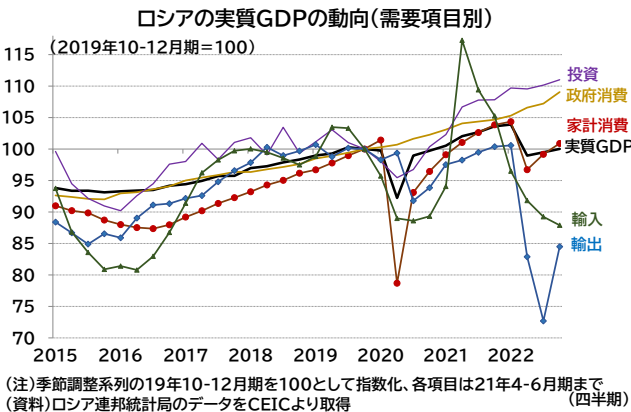
入ともにウクライナ侵攻後に大きく低下している状態が続いている（図表 4）。なお、輸出入以外の主要な需要項目を見ると、前年同期比で家計消費が▲2.7%、投資が+3.0%、前期比では家計消費+1.4%、投資+0.8%となっている。

（図表 3）

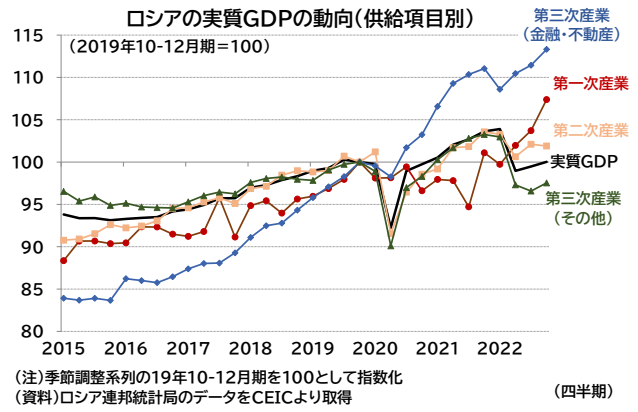


（注）□は2020年の実質GDP全体に対するウェイト、産業分類伸び率およびウェイトは筆者による試算
（資料）ロシア連邦統計局のデータをCEICより取得

（図表 4）



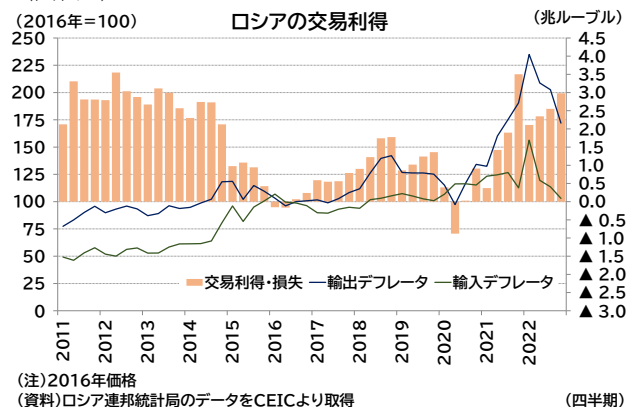
（図表 5）



産業別の前年同期比では、第一次産業と第三次産業（金融・不動産）がプラス成長となったが、第二次産業と第三次産業（その他）はマイナスとなっている（図表 3）²。前期比では、第二次産業がマイナスとなったが、第一次産業と第三次産業（金融・不動産）および第三次産業（その他）はプラス成長となった（図表 5）。なお、西側諸国の制裁で注目される原油生産に関連する鉱業は前期比 0.1%と小幅プラスとなっている。

名目成長率は10-12月期の前年同期比5.3%で7-9月期の8.2%から低下し、GDPデフレ率伸び率も10-12月期は前年同期比8.2%となり1-3月期の26.5%をピークから大幅に低下した。また、輸出入物価のデータも公表されている。輸出デフレ率および輸入デフレ率は、ともに1-3月期をピークとして下落傾向にある。ただし、輸出デフレ率が輸入デフレ率より高い水準上昇を維持しており、交易条件は改善傾向が継続していることが明らかになっている（図表 6）。

（図表 6）



² 自家利用の財・サービスは、便宜的に第三次産業（その他）に含めた。

（お願い）本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。